



## 会長挨拶

会長 高木 陽助

新春明けましておめでとーございます。

会員の皆様には、ご健勝に新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

お陰様で昨年十二月二十五日「徳永直文学選集Ⅱ」を上梓することができました。

昨年五月、「徳永直の会」の総会にて今年度の事業計画を提案し、お認めいただいた事業の中で、最も大変なものは「徳永直文学選集」の続編を発刊することでした。早速、六月六日に第一回目の会合を持って取り組み始めましたが、予定した編集委員の方々にそれぞれの都合があつて全員集まらず、中村先生をはじめ総勢五名という少人数になつてしまいました。さらに、熊本出版文化会館代表取締役の廣島さんから是非とも年内に上梓しようという提案もあつて、月二回程度の編集会議を目安に作業を進めてまいりました。が、緒方先生、永田先生は現役で校務が忙しい、中村先生はご承知のように忙しい、廣島さんも多方面で忙しく働いておられる等の事情があつ

て、なかなか思うようには進行しませんでした。それでも九月以降は精力的に作業を進め、最後は中村先生と廣島さんの大車輪の働きで上げることができました。

実は、前回の選集に収録されていないけれど、今回は是非収録したい素晴らしい作品が何編もあつて、しかも今回で一応作品集は終わりにせざるを得ないだろうという事情もあり、また、徳永直をより深く理解してもらうためには、さまざまな雑誌や新聞等に載せている評論も是非収録したいという希望も強く、前回並みの内容に押さえるのは至難の業でした。(収録したい作品、評論がまだ沢山残りました)

議論の末に、第二次世界大戦後書かれた、「徳永文学」を代表する長編『妻よねむれ』と『静かなる山々』(第一部)を中心に、単行本未収録の短編や熊本に関係した小品などの六編、さらに、徳永直の思想にも触れてもらうために、戦前・戦後の評論を七編、最後にソビエト文学者による「徳永直の小説」論を収録しました。←



装丁・宮崎静夫氏

『妻よねむれ』は戦後に書かれた作者の代表作の一つです。徳永直は大正十三年四月、二十五歳で看護婦佐藤トシヲと結婚しました。その妻トシヲが敗戦の昭和二十年六月、病気になっても、食料も満足にとれない空襲の中で死んでしまったのです。自分と同じ「絶対的貧困」の中で生きてきた妻に、「トシヲ」「お前」と語りはじめ、深い愛情で妻と自分の生き方を交錯させ、「お前はもう安心して眠れ！」と結んでいます。『静かなる山々』は長野県の諏訪湖のほとりを舞台にした作品ですが、「貧しい米作地帯の一工場における労働者の経済的並びに政治的な闘争を描いている」と言われます。一人ひとりの農民の現実が丁寧に描いてあり、農家育ちの私にとつて胸を打たれる場面が沢山あります。第二部までありますが紙幅の都合で第一部だけしか収録できませんでした。『豊年飢饉』から『町子』までが戦前、『泣かなかつた弱虫』『みちづれ』は戦後の作品です。特に、『みちづれ』は単行本未収録の作品で、昨年、孟宗忌の折に近代文学館から配布されました。妻に先立たれた初老の男と隣の病弱な寡婦との淡い恋を描いていて描写の力を感じます。

評論の部では、戦前、転向後「文学評論」に掲載した四本と戦後「新日本文学」や「人民文学」等に掲載した評論を採りました。紙幅が許されればもつともつと採りたかつたのですが、やむなく割愛しました。最後にソビエトの文学者イー・ルヴォヴァ氏の「徳永直の小説」論を採りました。東欧の共産主義社会の中でいかに徳永直が高く評価されていたかということがわかると思えます。

会員の皆様には是非ご購入いただいで「徳永文学」を味読してほしいと思っています。そして、友人・知人にも紹介していただき、一人でも多くの方々に「徳永文学」に触れて頂くことを願っています。

### 『徳永直文学選集Ⅱ』

#### ご購入のお願い

徳永直没後50年の昨年、皆様のご協力のもとに出身地である熊本から『徳永直文学選集』を出版いたしました。おかげさまでそれは大変に好評でした。そして、昨年秋には徳永直が熊本県文化功労者として表彰され、やっと正当な評価が下されたと感じました。

私どもは引き続き編集作業を進め、長編2本をはじめ、評論や資料を加えて『徳永直文学選集Ⅱ』を作成いたしました。収録作品は下記の通りです。ぜひともご購入をお願いいたします。

#### 収録作品

【創作】妻よねむれ/豊年飢饉/梶川ツルの死/洗馬橋附近/町子/泣かなかつた弱虫/みちづれ/静かなる山々

【評論】「創作技術に関する問題」の提唱/労働者作家の台頭/農家での十日間/ゴリキイの作品が持つ労働者性/停戦発表の日/小説を書いた私の経験/大衆は雑草ではない

【資料】徳永直の小説について

定価2500円+税125円⇒2300円(税・送料み)にて頒布いたします。

〒 860-0051

TEL 096(354)8201代

熊本市二本木3丁目1-2 8 熊本出版文化会館内 徳永直の会事務局 行

## 徳永直没後五〇年に寄する献詞

徳永直没後五〇年記念事業期成会会長 中村青史

徳永直にとって、帰るべき家は、ふるさと熊本に  
 かった。没後二〇年のとき、彼の文学碑を建立し、ふ  
 るさと熊本は彼を迎えた。没後五〇年、熊本は彼の文  
 学選集を出版し、講演会やシンポジウムや朗読会をもつ  
 て彼を迎えた。「お帰りなさい、徳永直」、多くの人々  
 が物心両面において、没後五〇年記念事業を支えた。ふ  
 るさとの、徳永直に対する熱い思いは、黒髪のまちを  
 覆い、立田山にこだました。「お帰りなさい、徳永直」、  
 いま、あなたのふるさと熊本は、あなたを温かく迎え  
 ている。あなたの民衆にそそいだ温かいまなざしを、  
 やつと、ふるさとの人びとも、あなたにお返しする時  
 がきた。プロレタリアートに土地は持てない、だから、  
 ふるさとにあなたが帰る家はない。だが、文学碑があ  
 り、文学選集がある。あなたを称える講演会場は、補  
 助椅子を運び込む盛況だ。あなたの偉業は、これから  
 は、日本の教科書にも採択されるだろう。あなたの安  
 住の地は、ふるさと熊本だ。

## 三十二回「孟宗忌」報告

熊本出身のプロレタリア作家徳永直（一八九九—一九五八）を  
 のぶ第三十二回「孟宗忌」が二〇〇九年二月十五日、同市黒髪の徳  
 永直文学碑前で行われた。徳永作品の愛読者でつくる「熊本・徳永  
 直の会」（中村青史会長）と熊本近代文学館が、命日の二月十五日  
 に合わせて毎年開催している。会員等約三十人が参加し、文学碑に  
 献酒、献花した。

中村会長が、代表作「太陽のない街」などを収めた選集刊行をは  
 じめ、没後五十年にあたる昨年活動のユーモアたっぷりな報告。  
 つづいて、高木陽助が四月から新会長に就任予定であることと、次  
 年度に「長編を集めた第二集の刊行を行い、その選集を利用して読  
 書会を実施しながら、徳永直を顕彰していきたい」と話した。

その後、場所を移して、熊本近代文学館で記念講演会を行い、昭  
 和三十八年八月、熊本県立図書館ホール（現在県立美術館分館）で  
 上演された演劇『他人の中』の演出を手がけた池田義一氏が、「演  
 劇『他人の中』上演のころ」と題して講演をなされた。当時の九州  
 の文化運動やプロレタリア演劇に対する思いを熱く語っていた。  
 さらに熊本朗読研究会の方に「他人の中」の一節を朗読してい  
 だいた。底辺生活者の悲しみが伝わってきて、涙が出そうになるく  
 らい、迫真の朗読であった。

最後は、近くの「十徳や」で恒例の親睦会。何時までも歓談が続  
 いていた。この時が定番とばかり張り切るゴジンもおられた。

（文責・高木陽助）



<第32回 孟宗忌記念写真>

第三十三回 孟宗忌のご案内

日時：平成二十二年二月十四日(日)

① 十一時～十一時半 徳永直文学碑前

(立田山登山口、泰勝寺入口)

・ 献酒、献花。経過報告。

② 十四時～十六時半 県立図書館二階会議室

・ 試写会と朗読 (ミニ展は近代文学館にて)

『はたらく一家』について

③ 十五時～十九時 「水前寺十徳や」にて懇親会

会費三千五百円(当日受付)

朗読・原武博之氏



講演・池田義一氏



## 徳永直文学の価値

編集広報 永田 満徳

徳永直の場合、プロレタリア作家、あるいは転向作家というレッテルがついて回り、徳永直の文学を捕らえることを拒んできたように感じる。イデオロギー云々で、作品を読むべきではないことを徳永直の文学は如実に教えている。

『最初の記憶』の末尾に「労働」の価値を強調し、「労働」は「現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛さよりも、はるかに益するものがある」と述べている。確かに、私自身、好みの作家は三島由紀夫や福永武彦、夏目漱石、芥川龍之介など、直の言うところの「恋愛」や「インテリゲンチヤのある種の悩み」、あるいは「消費生活の絢爛さ」を描いた作家が多かった。しかし、これまで「労働」に身を置いてきた経験から言って、間違いなく「労働」の持つ意味は日々増している。それだけに、「労働」の問題を素材にした徳永直の文学は真に迫るものがある。昭和十年の小説「梶川ツルの死」は「失業」問題を取り扱っている。その末尾に、失業することは喰うことに困ることだけではなく、「人間をヒンまげてしまつて、ルンペンにもなれば、殺してしまひさえする」と「私」に言わしめている。簡単に「リストラ」という形で、企業再生を考えている会社、それを容認している政治家に叩き付けてやりたいセリフである。このまま、未就職者の問題が放置されていると、直が心配する犯罪が増加

することは明らかである。

さて、戦後、転向文学への糾弾が盛んに行われた。徳永直もその対象になったが、今になってみれば、直が転向したのも生活者として生きなければならなかった者のギリギリの選択だったのだと思う。転向後も検閲のために伏せ字だらけの文章を見ると、妥協できないところは妥協しなかった作家だったと思われる。それは観念ではなく、生活者の核心をつかんでいるからである。生活者の苦しみがなくならない限り、生活者の苦しみを描き続けた小説の数々は不滅である。ここにこそ、徳永直の文学の読み直しを行われなければならない必然性がある。

日本を覆う労働環境の悪化は国民一人一人の「労働」の問題をなすがしろにしてきた結果である。それはプロレタリア作家としてレッテルを貼り、徳永直の文学を排除してきた結果でもある。プロレタリア作家、あるいは転向作家というレッテルを剥がして虚心地懐に見たとき、「労働」に纏わる問題を解決する手掛かりが見つかるように思われる。それがいわゆる「プロレタリア作家」に求められた「文学的効用」ということになろう。その意味では、逆説的になるが、徳永直は真の「プロレタリア作家」であったと言わねばならない。



<第2回 孟宗忌>

## 徳永直文学散歩①

永田 満徳

明治三十二年(1899)〜昭和三十三年(1958)。現・熊本市花園生まれ。小説家。黒髪小学校在籍中より、生活のために、竹箸作り、荷馬車挽きなど多くの労働を体験した。学校には行けなかったが、向学心に燃え、独学で勉学に励んだ。当時の様子は「最初の記憶」に詳しく描かれている。

現在、熊本市黒髪に住んでいた家屋はすでになくなっていて、旧居跡の標識が立っている。



## 旧居跡

プロレタリア文学の最高傑作といわれる『太陽のない街』を書いた直が6歳の頃から23歳まで居住していた。「労働」のもつ意味は何よりも「人類に益する」という考えを育んだところである。

## 「徳永直読書感想文」の募集を企画するにあたり

事務局長 緒方 宏章

今回「徳永直文学選集Ⅱ」の編集に携わり、考えたことがありますが。それは、この選集をより多くの方々、特に若い世代に、是非読んでもらいたいということです。

直は、少年の頃の経験をもとにした作品を、何編か残しています。「選集Ⅱ」に収録されている『泣かなかつた弱虫』『洗馬橋附近』『町子』や、「選集」収録の『最初の記憶』『こんにやく売り』『飛行機小僧』『他人の中』等は、時代背景は違っていますが、小・中・高生にも読んでほしい作品です。

そこで、今回の企画、「徳永直読書感想文」の募集を考えました。直が郷土熊本出身であることや、世界に認められたプロレタリア作家であることをご存じの方は意外と少ないのではないのでしょうか。特に若い世代では、この傾向が顕著だと感じます。この企画を通して、徳永直や彼の作品を広く知ってもらいたい、特に小・中・高生が直の作品を読む機会を持つことで読者の裾野を広げるとともに後生にも伝えたいという思いを強く持っています。

感想文の募集をするにあたっては、各方面からの協力が必要となります。各学校への依頼や、資金面での後押しも欠かせません。初めての企画でもあり、運営等に不安があることも確かです。しかしここで一歩前へ進むことが、大切なことではないでしょうか。

総会を控え、より効果的な募集要項案を作りたいと考えています。それのために会員の皆様のご協力は、なくてはならない存在です。皆様からの貴重なご意見を、お待ちしております。

## 第1回「徳永直読書感想文」募集について (案)

徳永直没後 50 年にあたる 2008 年に「徳永直文学選集」、翌 09 年に「徳永直文学選集Ⅱ」を刊行しました。これを機に多くの方々に、徳永直の作品に触れていただきたいと考えております。

そこで「徳永直の会」では、徳永直の作品を読んだ感想文を、次の要項で募集いたします。多くの方々の応募をお願いします。

- 1 趣 旨 徳永直の功績をたたえ、彼の作品を対象とする感想文を募集することで、直の作品の読書をすすめ、豊かな心を育てるとともに、労働に対する理解を深めることを目的とします。
- 2 主 催 「徳永直の会」
- 3 対象図書 徳永直の作品
- 4 応募内容 読書感想文（未発表のものに限る。400 字詰め原稿用紙での枚数：本文のみ）
  - ①小学生の部 2 枚～3 枚（401 字～1200 字）
  - ②中学生の部 3 枚～4 枚（801 字～1600 字）
  - ③高校生の部 4 枚～5 枚（1201 字～2000 字）
  - ④一般の部 4 枚～5 枚（1201 字～2000 字）
- 5 応募方法 応募作品に応募用紙を添付し、郵送か E メール（添付ファイルは Word か一太郎）にて応募してください。
- 6 応募期間 2010 年 8 月 1 日～2010 年 11 月 30 日（郵送の場合、当日消印可）
- 7 賞
  - ①最優秀賞（各部門 1 名以内）  
賞状、賞品（図書カード 3000 円分）
  - ②優 秀 賞（各部門 3 名以内）  
賞状、賞品（図書カード 1000 円分）
  - ③佳 作（各部門 10 名以内）  
賞状
  - ④学 校 賞（1 校以内）多くの作品を応募いただいた学校の中から選ばせていただきます。  
賞状、賞品（図書カード 5000 円分）
- 8 選 考 選考委員会において、作品を良く読みこなし表現力等に優れた作品を選びます。
- 9 結果発表 2011 年 1 月に、入賞者に直接お伝えします。また「徳永直の会会報」で発表します。最優秀賞及び優秀賞については、作品集に掲載します。入賞者については、氏名、住所（市区町村名まで）または学校名、年齢または学年等を報道機関にも公表します。
- 10 表彰式 2011 年 2 月 13 日（日）午後 2 時（孟宗忌当日） 熊本近代文学館（予定）  
最優秀賞、優秀賞を受賞された方を対象とします。なお表彰式出席に要する諸費用は、本人負担となります。
- 11 応募先・問い合わせ先 〒 860-0051 熊本市二本木 3 丁目 1-28 熊本出版文化会館内  
「徳永直の会」事務局 E メール open-island@r4.dion.ne.jp  
携帯電話 090 - 5944 - 1573（高木）

### 「徳永直読書感想文」応募用紙

（形式をまねて作られても構いません）

題 名			
フリガナ			
氏 名	( ) 歳		
学校名または職業			学 年
学 校 もしくは 自宅の住所	〒	-	電 話 番 号
対 象 作 品			

\* 次年度の総会で決定したいと考えています。ご意見をお願いします。

2009年度(4月～12月)会計報告

収 入		支 出	
前年度繰越金	207,765	事務費	23,738
2009年度会費	94,000	通信費	14,920
		2009年度総会会場費	1,600
収入合計	301,765	支出合計	40,258
残 高			261,507

- \* 2009年度の会計報告は、総会時に行います。
- \* 孟宗忌当日、会費(2,000円)の徴収も行います。  
2009年度(未納の方)及び2010年度会費の納入をお願いします。

前会長の中村青史先生

荒木精之記念文化功労者に選ばれる！

前会長の中村青史先生が昨年八月六日に、県文化協会（小堀富夫会長）より、地域文化や専門分野で貢献した個人を顕彰する荒木精之記念文化功労者に選ばれた。これは、徳永直研究の第一人者として、一九七九年から今年四月まで「熊本・徳永直の会」の代表世話人を務め、文学碑建立や選集の発刊などに尽力されたこと、さらに夏目漱石や小泉八雲など文学者の顕彰活動を長年続けておられることを評価されたことである。

編集後記

▽『徳永直文学選集Ⅱ』が刊行された。この出版で、第一期の出版活動は終了する。『徳永直文学選集』と併せると、徳永直の文学の全体像が浮かび上がってくる。

▽この二つの『徳永直文学選集』をご購読いただき、徳永直を郷土の誇りとして顕彰活動にご協力ください。

▽中村青史先生が荒木精之記念文化功労者に選ばれた。地域文化を誇りにし、大切にするばかりではなく、全国にも熊本文化を発信しようと思われた荒木精之氏の遺志を継いでいるのは中村先生以外にはいないと思っていたので、最もふさわしい人に送られたと思っ

(文責・永田満徳)